

ジャパンハート
看護師・プロジェクトディレクター

河野 朋子

1989年10月、日本初の小児生体肝移植が実施されたというニュースを、当時中学生だった私は何気なく新聞で目にしていた。まだ看護師になることも決めていなかったし、特に関心が強かったという訳でもなかったはずだ。なのに、その時に肝移植を受けた子どもの表情や名前が、今でもしっかりと私の脳裏に焼き付いている。

その後、看護の道へと進み、日本ならば助かる命が助からないという、厳しい環境にある開発途上国での活動を志望し、14年前にジャパンハートの看護研修生として、ミャンマーへとやって来た。そして今、ミャンマーで初となる小児生体肝移植の成功に向け、日本およびミャンマーの医師たちと共に奮闘している。



オッカー君とその両親
（九州大学病院にて）

現に向けての動きは、九州大学の小児外科チームの多大なる協力を受けながら約2年前からスタート。現地医師への技術指導や講義から始まり、日本での肝移植の見学を経て、2018

に、その頃のミャンマーでは、まだまだそれは手の届かないところにあった。我が子を失うかもしれない不安を常に抱えながら、それでも大切に、大切にオッカー君を育てて来た両親。

日本のチャレンジから30年、そして、今、ミャンマーで

現在、日本では小児肝移植の技術は確立し、それによって多くの幼い命が救われるようになってきている。その30年間にわたる日本での試行錯誤が、今、ここミャンマーでもまもなく実を結ぼうとしている。昔見た記事が鮮明に蘇ると共に、自分がここに携わっている事に、何とも言えない縁を感じる。

ジャパンハートは、現在「日本の先進技術でミャンマーの子どもたちを救う」ことを目標にして、日本およびミャンマーの医療者と共に小児先天性心疾患治療などの高度先進医療の発展にも取り組む。

ミャンマーでの小児生体肝移植実

年3月には胆道閉鎖症によって肝移植でしか助かる見込みのないオッカーチョー（3歳・男児）君をミャンマー人医師と共に日本に招き、九州大学病院にて父親からの生体肝移植を実施するまでに至った。約8カ月に渡るこの渡航に同行した私は、両親から様々な想いを聞くこととなる。

オッカー君が生後数カ月の頃「この子は4歳くらいまでしか生きられないだろう」と医師から告げられた両親。その日は小さい我が子を抱き締めながら、2人で一晩中泣き明かしたそうだ。もし、日本や先進国であれば、肝移植によって命を繋ぐことが出来るの

強い思いがチャンスを引き寄せ、肝移植の成功によってオッカー君は元気に4歳の誕生日を迎える事が出来た。

両親は言う。「息子と同じ病気で苦しんでいる子ども達も救ってほしい」と。こうしている間にも、この時を待たず、こぼれ落ちて行った多くの命がある事を私もミャンマー人の医師たちも知っている。だからこそ、医療環境や制度が30年前の日本のようなレベルに達しているとは言い難くても、日本とミャンマーのプロフェッショナルたちがベストな環境を作り出すべく必死に動いている。30年前の日本のように、チャレンジするべき時は今だと信じて。

河野 朋子
（このとこ）

1998年より看護師として兵庫県立こども病院、助産師の資格取得後、国立循環器病研究センターの周産期病棟に勤務後、2005年より認定NPO法人ジャパンハートの看護研修に参加。ミャンマーでの医療活動に従事。その後もスタッフとしてミャンマー事業の立ち上げに携わる。ミャンマー専門医療プロジェクトのProject Directorとして現在に至る。